

## 目次

一 『東海道山すじ日記』 武四郎の旅	P. 3
二 『山すじ日記』 松浦武四郎行程図	P. 7
三 「カシミール3D」データ	P. 8
四 各ページ最初の地図について	P. 9
五 主な参考資料	P. 9
六 小田井蔵太のこと	P. 14
七 出発地点	P. 18

## 一 『東海道山すじ日記』

武四郎の旅

明治二(1869)年

① 二月十日(新曆三月二日) 月齢8.8

馬場先門内岩倉具視邸↓青山通りⅡ(凡二里)↓宮益↓世田谷(馬継・百軒斗)Ⅱ(二里半)  
 ↓二子渡し(六郷川「多摩川」舟渡)Ⅱ(十八丁・日本橋より四里)↓溝の口(町並・茶店  
 旅籠屋)↓四十八坂Ⅱ(二里)↓窪田「大系14P236中」↓長津田(馬継旅籠屋茶店・昼食)Ⅱ(一  
 里八丁)↓鶴間(馬継茶店Ⅱ(八丁)↓相模鶴間(馬継茶店・是より相模の国)Ⅱ(二筋道二里)  
 ↓国分村(馬継茶店・国分尼寺)Ⅱ(凡二八〇九丁)↓柏ヶ谷村(村端馬入川「相模川」舟渡)  
 Ⅱ(八丁)↓厚木宿(馬継茶店旅籠屋・三千軒の市町・豪商川船妓等・泊り)

② 二月十一日(新曆三月三日) 月齢9.8

## 資料

厚木宿↓上岡田↓下岡田↓酒井↓小柳村Ⅱ(一里)↓愛甲(名主宅で馬継)↓石田村Ⅱ(一里)  
 ↓糟屋(市町乗馬・名主で馬継・旅籠屋)↓伊勢原村Ⅱ(一里)↓神渡「神戸」(市町少し・馬

継)↓城の内村「坪の内」(十八丁)↓前波「善波」(馬継)Ⅱ(凡十丁)↓峠「善波峠」(眺望甚良)Ⅱ(二里)↓十日市場(市町乗馬・旅籠屋馬継)↓會屋Ⅱ(上道を一里行く)↓千村(山の上一村落)Ⅱ(九折下り凡半里)↓川筋に茶店↓四十八瀬Ⅱ(二里)↓神山村(名主宅で馬継)↓松田村?↓十文字川(仮橋・酒匂川の上)↓町屋↓吉田島↓延沢村Ⅱ(坂道下り二里・小田原より三里)↓関本(少し町並・馬継)↓片上里?↓雨坪村↓弘西寺村↓刈岩村↓一色村Ⅱ(二里八丁)↓矢倉沢(二十軒斗・茶屋・関所守なし)Ⅱ(二十丁上り十六〜七丁下り)↓地藏堂村(十七〜八軒・足柄の地藏)Ⅱ(九折嶮処上り一里)↓足柄峠(地藏堂・甘酒売る八郎兵衛・駿相の境・眺望良)Ⅱ(片下り一里八丁・往古の湖道・並松の大樹・一里)↓竹の下(二百余軒・茶屋旅籠屋馬継・泊る)

③二月十二日(新曆三月二四日) 月齡10.8

竹の下Ⅱ(坂道四〜五丁上り・並木通り)↓厩や村?Ⅱ(一里)↓御殿場(三百軒斗・町並・茶屋馬継)↓埃沢「藍沢か?」通り(二里に近い)↓印野(百軒斗・三九石・光徳寺・昼飯)Ⅱ(少し爪先上り細き有なしの道)↓独活沢?(清水有)↓須山口?(鳥居)Ⅱ(半里斗)↓岳と足高山間の木立原Ⅱ(印野より二里半)↓十里木(九軒・須山の枝郷・名主宅茶屋)Ⅱ(二里斗下り)↓世古辻(上中下道)↓大淵村(十里木より三里・三十軒斗散居・大柏・結香)↓杉谷村「杉田」Ⅱ(甲州路を二里半)↓大宮町「富士宮」(千軒・乗馬茶屋旅籠屋・止宿)

④二月十三日(新曆三月二五日) 月齡11.8

万農原「万野原」(町より半里斗の新畑)を尋ねる  
大宮町(大宮参詣)↓野中村↓治窪村「沼窪」↓峠↓羽鮒村↓はふな川「芝川」(滝のごとき急流・兩岸絶壁に藤縄を張りくり船渡し)↓長貫村(茶屋二軒程蕎麦切を売る)Ⅱ(大宮より三里)↓釣橋(長凡六十間殿壁の上に藤縄を張り籠架を組付けてある足おのゝきて実に当惑)「大系SP410下」↓人家三軒・洪水に畑流された五〜八丁の白川原↓水廻り通り?Ⅱ(二十丁斗上り)↓細谷川↓峠Ⅱ(釣橋より一里半・冲津より四里八丁・甲州身延山の湖道九里)↓宍原(百三十〜四十軒・馬継旅籠屋・禅宗寺一軒・上に朝日に向う滝・雄滝雌滝・年寄多左衛門・問屋源左衛門の懇ろな世話)

⑤二月十四日(新曆三月二六日) 月齡12.8 天候 小雨

宍原Ⅱ(細道九折登り凡二五〜六丁)↓向こうに大沢の五段滝Ⅱ(七〜八丁上り)↓椿峠Ⅱ(十丁斗下り)↓不動沢の滝上(奇観)↓大処(墓と森・廃村大処村)Ⅱ(宍原より凡二里)↓小川村(三十軒斗村並至て良)↓板峠↓榎峠Ⅱ(小川村より二十丁斗)↓和田島村(十七〜八軒)Ⅱ(十七〜八丁)↓しげの島村「茂野島」↓上つゝら沢村「葛沢」(人家良・川南)↓土村(川南・人家良)Ⅱ(小坂一つ越え)↓黒川村(五十軒斗・駿府御城の御鋸物を献ずる・助郷人足は御免・小蟹のため山葵不可)

⑥二月十五日(新曆三月二七日) 月齡13.8 天候 小雨

黒川村Ⅱ(川瀬三つ斗過坂道十八く九丁・凡二十丁攀上り・十丁)↓道もあるかなし岩角苔生し迂る↓(山の横通り十丁余)↓峠という辺・井戸の沢(水有)Ⅱ(五く六丁・黒川村より一里)↓駒曳峠「駒引峠」(杉の木有)Ⅱ(五く六丁)↓結香畑Ⅱ(十二く三丁・山上より下り一里近し)↓人家↓俵岸村「俵峯」(三十軒斗)Ⅱ(二七く八丁下り)↓俵沢村(三十軒斗)Ⅱ(川端十丁斗上り)↓油島村(十五く六軒・貧村・前で川筋二つに成る)↓中沢村↓桂山村(五く六十軒・乗馬・茶紙問屋等)↓只間村「唯間」(家並良・中河内)↓落合村(二十軒斗・西河内谷・二百文位ずつ紙に包んで出す)Ⅱ(凡二十丁斗)↓寺尾村(六軒・名主に宿を乞うが断られる・村役の迷惑)

⑦二月十六日(新曆三月二八日) 月齡14.8 満月

寺尾村Ⅱ(十丁)↓沢村「次村か?」の内匠村Ⅱ(坂至て急・狼の糞・凡一里)↓樫の木峠Ⅱ(九折下り一里)↓日向村(五く六十軒・名主は産神の神主)Ⅱ(坂道上り一里八丁)↓洗沢峠(地神社・二軒近比一軒増・三筋の道落合)Ⅱ(峯まゝ十丁)↓地藏堂(右大井川の上・左榊尾「坂京」峠越田の口村へ直道)Ⅱ(右より一里半斗下り)↓杉の根に清水有↓小峠(大杉有)↓真瀬「摩字・馬路」の大橋Ⅱ(眺望実に見工神鑄の妙)Ⅱ(狼・猪・熊等を捕る仕懸(実におそろしきもの也)Ⅱ(峠より三里八丁)↓藤川村・小永井村(泊る)

⑧二月十七日(新曆三月二九日) 月齡15.8 天候 雨少し

小永井村↓天王社(小永井長門守城跡)↓峯村「岸」↓田代村↓坂木尾「坂京」沢(川原へ出)Ⅱ(十丁斗下り・小永井より一里半)↓青部村↓沢澗村↓堀の内村「徳山」↓庄島村「正島」↓田の口村(洗沢峠より直道)Ⅱ(深さ二尺五寸渉り七尺位の盪越し・十八丁)↓梅島(庄屋名主高木八兵衛宅にて昼飯)Ⅱ(峠「二本松峠」一つ越え凡一里)↓麦代村(山の上・十五く六軒・下長尾の出郷)Ⅱ(半里斗上り)↓権現峠Ⅱ(山谷に下る凡半里)↓人家一く二軒Ⅱ(三く四丁)↓人家二く三軒ずつⅡ(凡半里)↓田河内村(名主造酒屋・宿を乞・大井川筋より大に寒し)

⑨二月十八日(新曆三月三十日) 月齡16.8 天候 夕方方みぞれ雨のち晴れ

田河内村Ⅱ(川下り峠を越え一里)↓花島村(二十軒斗)Ⅱ(左秋葉道)↓いさ川村「砂川」Ⅱ(半里)↓和泉平Ⅱ(半里)↓中谷Ⅱ(半里)↓平生「平尾」Ⅱ(半里)↓若之平「若身平」(人家並良・村すじに川・船渡し)Ⅱ(十丁)↓大居村(百軒斗の町・旅籠屋・名主白木や積問屋で継立・秋葉山表口・泊り)

⑩ 二月十九日(新曆三月三十一日) 月齢17.8

大居村↓和田谷「和田之谷」(旅籠屋)↓中沢「長沢」(旅籠屋)↓領家村「(三二丁)↓峯小屋  
 ・中小屋(横川村より出茶屋)「(十八丁上り)↓光明山(曹洞禅・茶店)「(五十丁下り)↓  
 山東村「(四十八瀬の十八瀬を凡二五く六丁下り)↓二股村「二俣」(二く三百軒町・商人  
 旅籠屋繁昌の地)「(小峠一つ越えて)↓東鹿島村「北鹿島」「(天龍川船渡し」[今須之渡(大  
 系1083中)、今津渡(大系1083下)]」↓西鹿島村(積問屋・家並良)「(十八丁野道)↓岩水村  
 (岩水寺本尊薬師如来・大岩窟より薬効ある清水)↓宮の口「宮口」(町二百軒斗・商人旅籠  
 屋茶屋・市日賑やか)↓味方が原「三方原」「(宮ノ口より三里)↓気賀「気賀」(関門開き  
 切り・宿す)

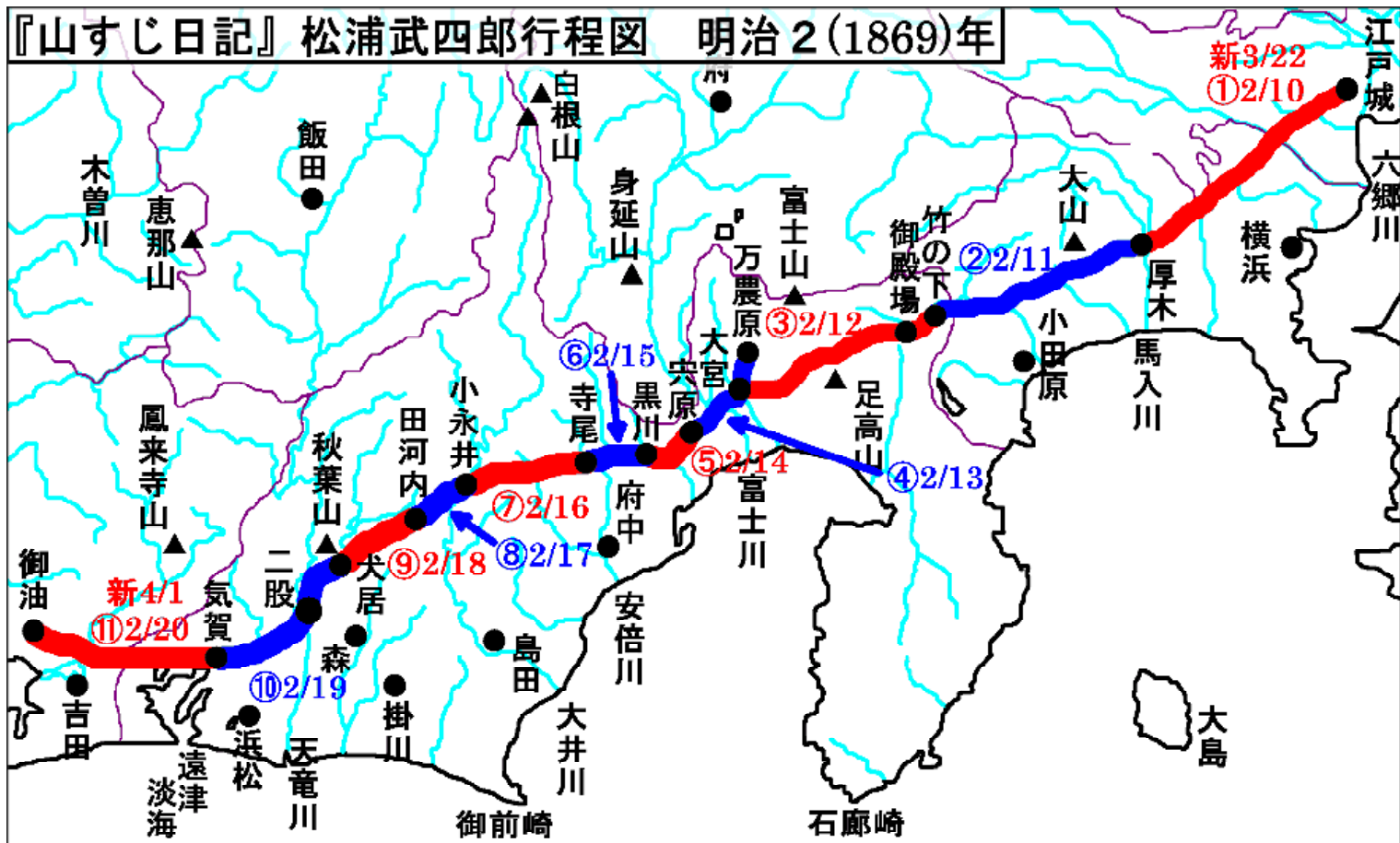
⑪ 二月二十日(新曆四月一日) 月齢18.8 天候 雨気

気賀↓いなさ「引佐」峠「(三里)↓三日火「三ヶ日」↓本坂越「是より三河国」「(二里半)  
 ↓嵩山「(三里)↓長柄「長良・長楽」「(一里)↓御油宿

( ) 中は記事の概略等。

地名の読みおよび「」中は広谷調べ。

青字地名は昼食地。赤字地名は泊地。



### ☐ 「カシミール3D」データ

(GDBファイル 測地系WGSS84)

#### ◎内容

1. トラックデータ  
武四郎の歩いた経路 (広谷予測) **ピンク色の実線**  
広谷の追跡した経路 車で移動 **青色の実線**  
歩道の徒歩 **茶色の実線**  
難路の徒歩 **赤色の実線**
2. ウェイポイントデータ **赤●ポイント**  
武四郎の『山すじ日記』に記された地点。  
位置は『正式二万図』に準じた。地名の読み仮名は広谷調べ。標高は国土地理院二万五千分の一地形図による。  
**青●ポイント** その他の地点。

#### ◎使用法

フリーソフト「カシミール3D」の最新版で次の地図データを運用し、後のデータをご利用ください。

フリーソフト「カシミール3D」入手ページ

[DAN杉本さんの「カシミール3D」のホームページ](#)

地図データ ☆[国土地理院の「地図閲覧サービス\(ウオッチーズ\)」](#)

(無料試験公開・閲覧のみ)

☆書籍『カシミール3D』各解説本の付録CD・DVD

(杉本智彦著 実業之日本社 この地図の使用については、[国土地理院の「申請フロー」ページ](#)を見てください)

☆他

◎使用GPSハンディナビ機 Garmin社製GPSmap60CSx

[「カシミール3D」データ](#) ↑ここをクリック

## 四 各ページ最初の地図について

### ◎経路の様式

武四郎の歩いた経路（広谷予測） ピンク色の実線  
広谷の追跡した経路 車で移動 青色の実線  
歩道の徒歩 茶色の実線  
難路の徒歩 赤色の実線

### ◎地点の様式

赤● 武四郎の『山すじ日記』に記された地点。  
位置は『正式二万図』に準じた。  
青● その他の地点。

### ◎作成使用ソフト

フリーソフト「カシミール3D」

### ◎使用GPSハンディナビ機

Garmin社製GPSmap60CSx

### ◎使用地図

『改訂新版 カシミール3D入門編』付録 1/2.5万地図  
（杉本智彦著 実業之日本社 平成二二年）

これらの地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（地図画像）及び数値地図50mメッシュ（標高）を使用しました。

平成二二年は（承認番号 平22業使、第354号）  
平成二三年は（承認番号 平23業使、第401号）

## 五 主な参考資料

### \*本文\*

- 『松浦武四郎紀行集』上 昭和五二年 富山房 吉田武三・編  
『東海道山すじ日記』（本文と原文影印、現代語訳） 平成十三年 羽衣出版 宮本勉・編  
『東海道山筋日記』（ホームページ）もぐらもち新聞』中の「松浦武四郎案内処」に公表された本文のPDFファイル。原文影印付き。現在のところ最も厳密な翻刻）

<http://sada.1a.coocan.jp/take/yamasuji/yamasuji.pdf>

## \*他の紀行\*

- 『日本旅行日記』 1・2 (東洋文庫544・550) (明治十四・十五年、秋葉山・大井川源・富士川等の紀行) 平成四年 アーネスト・サトウ・著 庄田元男・訳  
『濱つづら 全』 (文化六く文政元年、志太・益頭・有度・安倍・富士・庵原・駿東の各郡 および大井川源の紀行) 平成七年 桑原藤泰・著 宮本勉・編

## \*地理・歴史\*

- 『静岡県周智郡誌』 大正六年 静岡県周智郡教育会  
『光明村誌』 昭和三四年 光明村誌編集委員会  
『大井川とその周辺』 昭和四二年 いずみ出版 浅井治平・著  
『遠山奇談』 (寛政期の山地奇談) 華誘居士・著  
(日本庶民生活史料集成16) 昭和四五年 三一書房  
『折口信夫全集』 全六四巻 昭和四五く平成十四年 中央公論社 折口信夫全集刊行会他・編集  
『静岡県引佐郡誌』 上・下 昭和四七年 引佐郡教育会  
『天竜市史』 全十一巻 昭和四九く平成三年 天竜市役所  
『駿河記』 上・下 (文政元年著の大地歴史 昭和七年版の復刻) 昭和四九年 臨川書店 桑原藤泰・著 足立鋏太郎・校訂  
『中川根町史』 全四巻 昭和五十五く平成十八年 中川根町・川根本町 中川根町史編さん委員会・編集  
『東京都』『神奈川県』『静岡県』『愛知県』 (角川日本地名大辞典13、14、22、23) 昭和五三く平成元年 角川書店  
『日本城郭大系』 全二〇巻 昭和五四く五六年 新人物往来社  
『本川根町史』 全十巻 昭和五五く平成十七年 本川根町  
『遠江国風土記伝』 (寛政期の地歴史 昭和十年版の復刻) 昭和五五年 世界聖典刊行協会 内山真龍・著 加藤管根、皆川剛六・訳  
『犬居城主天野氏と戦国史』 昭和五五年 犬居城址顕彰会 小澤舜次・著 昭和六〇年 改訂  
『東京都の地名』『神奈川県の地名』『静岡県の地名』『愛知県の地名』

(日本歴史地名体系13、14、22、23) 昭和五六〜平成十四年 平凡社

『静岡県郷土研究』全二〇輯 昭和八〜十八年 静岡県郷土研究協会

復刻『静岡県郷土研究』全八巻 昭和五七年 国書刊行会

『静岡県地名辞典』 昭和五七年 NHK静岡放送局

『ふるさと本川根』 昭和六二年 本川根町教育委員会

『ふるさとものがたり天竜』 昭和六二年 上阿多古草ぶえ会

『天竜川と秋葉街道』 昭和六二年 明文出版社 神谷昌志・著

『校注簡約松浦武四郎自伝』 昭和六三年

松浦武四郎没後一〇〇年記念事業協賛会 松浦武四郎研究会・編

『藁科物語』全四号 平成二〜十二年 静岡市立藁科図書館・編集・発行

『遠江古蹟図絵 全』(享和期の図絵・解説集) 平成十三年 明文出版社 藤長庚・著

神谷昌志・修訂、著

『春野町史』全五巻 平成三〜十一年 春野町 春野町史編さん委員会・編集

『静岡県明治銅版画風景集』(明治二五・二六年版の復刻)

平成三年 羽衣出版 若林淳之・解説

『大井川の川越し』 平成四年 島田市教育委員会

『いってんばの古道』 平成六年 御殿場市立図書館古文書を読む会・編集・発行

『静岡県史料』全五輯 昭和七〜十六年 静岡県 復刻 平成六年 臨川書店

『静岡県歴史の道 姫街道』 平成七年 静岡県教育委員会文化課・編集・発行

『静岡県歴史の道 秋葉街道』 平成八年 静岡県文化財保存協会・発行

静岡県教育委員会文化課・編集

『富士川と通船の歴史』 平成九年 静岡県富士県行政センター 遠藤秀男・執筆

『掛川誌稿 全翻刻』(化政期、掛川藩士の実地踏査による藩領内外の地誌) 平成九年

静岡新聞社 斎田茂先、山本忠英・著 中村育男・翻刻

『駿河記 絵図集成』 平成十年 羽衣出版 桑原藤泰・著 宮本勉・解説

『古街道を行く』 平成十四年 静岡新聞社 鈴木茂伸・著

『図説 中川根の歴史』 平成十四年 中川根町 中川根町史編さん委員会・編集

『駿州富士郡大宮町 角田桜岳日記』全五卷（武四郎の友人、佐野与市の日記）

平成十六〜二十二年 富士宮市教育委員会・編集・発行

『田河内今昔』

平成二三年 栗島清・著

### \*地図\*

『迅速測図』（明治初期から中期にかけて関東地方を対象に作成された二万分の一地図が閲覧できるホームページ。現代の道路や鉄道が重ねられている。『山すじ日記』関連では江戸馬場先門〜神山村・松田村）

「歴史的農業環境閲覧システム」<http://habs.dc.affrc.go.jp/index.html>

『大日本管轄分地図』

昭和四三年 人文社 日本地図選集刊行委員会・編

『五千分の一 江戸―東京市街地図集成 第1期』（明暦三〜明治二八年の古絵地図）

平成四年 柏書房 地図資料編纂会・編

『矢倉沢通見取絵図』第一・二巻（文化三年、江戸幕府道中奉行所によって作成された街道実測絵図）平成四年 東京美術 児玉幸多・監修

『情報アーカイブ 古地図』（東京国立博物館のページ。「江戸絵図」など、内外の貴重な

古地図が閲覧できる）<http://webarchives.tnm.jp/pages/oldmaps/index.html>

『正式二万分一地形図集成』東日本 平成十三年 柏書房 地図資料編纂会・編

（明治十九〜四二年頃測量・二二〜四四年頃出版の陸測図）

(93) 「東京主部」 馬場先門跡〜青山

(104) 「東京南部」 青山

(107) 「世田ヶ谷」 渋谷〜世田ヶ谷〜溝ノ口

(108) 「溝口」 溝口

(113) 「荏田」 宮前〜荏田

(114) 「小机」 下長津田

(121) 「長津田」 長津田〜下鶴間

(122) 「用田」 柏ヶ谷〜国分

(127) 「厚木」 国分〜厚木〜糟屋

(128) 「伊勢原」 伊勢原

(133) 「秦野」 伊勢原〜曾屋

(138) 「松田惣領」 千村〜吉田島

(159) 「関本村」 吉田島〜関本

(164) 「矢倉澤村」 雨坪〜足柄峠

『正式二万分一地形図集成』中部日本1 平成十四年 柏書房 地図資料編纂会・編

- (35) 「御殿場村」 竹の下～御殿場～茱萸原
- (40) 「印野村」 印野
- (41) 「須山村」 十里木～世古辻
- (46) 「越前岳」 杉田～大宮町～野中
- (51) 「大宮町」 羽鮒～長貫
- (55) 「富河村」 芝川
- (52) 「吉原宿」 長貫～宍原～椿峠
- (56) 「宍原村」 椿峠
- (77) 「中河内」 小川～榎峠～和田島～黒川～駒曳峠
- (78) 「龍爪山」 駒曳峠～俵峰～俵沢～佳山～寺尾
- (80) 「玉川村」 榎の木峠～日向～洗沢
- (82) 「大川村」 正島～水川
- (84) 「笹間村」 水川～梅島～権現峠
- (85) 「中川根村」 田河内
- (101) 「下川根村」 花島～砂川～和泉平～平野
- (115) 「熊切村」 若身平～犬居～和田谷
- (120) 「秋葉山」 領家長澤～峯小屋～光明山～東山
- (121) 「光明村」 二俣～西鹿島
- (122) 「二俣町」 宮口～都田
- (127) 「龜玉村」 瀬戸～気賀～引佐峠
- (132) 「気賀町」 三ヶ日～本坂
- (133) 「北庄内村」 本坂峠～嵩山
- (138) 「猪鼻湖」 長良～豊川
- (137) 「富岡」 御油
- (168) 「石巻山」
- (167) 「吉祥山」
- (172) 「御油」

『五万分一地形図』

(明治二〇～二三年頃測図・三三～四二年頃出版の陸測図)

- 「御殿場」 竹の下～御殿場～印野～世古辻
- 「大宮」 杉田～大宮町～長貫
- 「吉原町」 宍原
- 「清水町」 小川～黒川～俵沢～榎の木峠
- 「千頭」 日向～洗沢～小長井～梅島～権現峠
- 「家山」 田河内
- 「秋葉山」 花島～犬居～光明山～東山～西鹿島

「見附町」 宮口  
 「浜松町」 都田く気賀く三ヶ日く本坂  
 「豊橋町」 本坂峠く長良く豊川

**\* 記念館 \***

「松浦武四郎記念館」〒515-2109 三重県松阪市小野江町三八三番地  
 (〇五九八―五六―六八四七) 「近鉄伊勢中川駅よりタクシー七分、徒歩四〇分」

徒歩で行かれる方は、自分で経路を調べてください

[http://www.city.matsusaka.mie.jp/bunka/shisetsu/take\\_mu/take\\_kinenkan.html](http://www.city.matsusaka.mie.jp/bunka/shisetsu/take_mu/take_kinenkan.html)

**【六】 小田井蔵太の二二**

『山すじ日記』の冒頭に記された小田井蔵太おたいいくらたの描かれ方が、私には以前からたいへん気に掛かっていた。雨の深夜、武四郎宅の戸を叩く者があり、それは実際には新政府東征大総督参謀の呼び出しだったのだが、武四郎は上野の山に立て籠もる幕府方彰義隊の隊頭小田井蔵太が、隊を引き連れてかつての意趣返しに来たのではないかと恐れている。そしてそのすぐ後、武四郎の筆は小田井のことを「生来不仁不慈は併あそばさ無き男なり：如何にも腹くるぎ男にて蝦夷人等の難儀に及ぶことの已おひ致し」と酷評している。釧路で働いた不正を武四郎からきつく意見されたことにより、何となく気が合わなくなり、小田井は武四郎を恨むようになっていたとされている。

小田井は武四郎の十歳ほど年上。二人とも幕府の傑出した大人物堀織部ほりおり正利しょうとし熙の薫陶を受けた元部下。武四郎の安政三(一八五六)年と安政五(一八五八)年の蝦夷地の旅では、小田井は函館奉行所の同心として釧路の勤番所に詰めていた。

互いのことをあらかじめ堀奉行から聞かされていただろうから、安政三年に会った時には、親愛の情を交わしたのではないだろうか。武四郎は、途中見掛けた「砥石」産出の情報提供など、小田井の勤めの助けになろうと心掛けているようにみえる。また『竹四郎廻浦日記』の第二六巻には「小田井某の義気に感じ」とも記している。

安政五年には、小田井は自ら求めて釧路く阿寒く網走く摩周・屈斜路く釧路の計二三日

間(『校注簡約松浦武四郎自伝』では十九日間)に及ぶ武四郎の困難な奥地旅行に同行している。

この間、『竹四郎廻浦日記』や『辰手控』、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』や『午手控』などの中に、浅学の私が知る限りでは、小田井を非難したり嫌悪する表現は見当たらないように思う。ただ、『近世蝦夷人物誌』の「ムンケ、」に登場する「強将」や、挿絵に描かれた侍は、釧路地方のアイヌに和人風の髪型や和人名を強制して苦しめる人物だが、これは小田井その人かもしれない。しかし、実名を挙げることはもちろん、強い非難の調子をも注意深く避ける武四郎の筆ぶりだ。

ところが一転、『山すじ日記』の小田井評はどうだろうか。この大きな変化が、私にはどうも気に掛かる。吉川弘文館人物叢書『松浦武四郎』の著者までもが、それを受けたのか安政三年の項で「この小田井というのは、面従腹背の佞奸の人物だった」と評し、取り付く島がない。そこで、小田井蔵太の実像に少しでも近づこうと、小田井の故郷福島県の県立図書館や、郷土史研究家に情報提供をお願いした。

提供いただいた資料を読むと、小田井は幼少時に父を失って苦労したが、「小より豪放にして大志あり」、槍術海内第一と称された者を打ち負かしたほどの優れた武道家だった。彰義隊の頭に推挙されて血気盛んな多くの佐幕派武士たちの指導者を務めたり、のち新政府から水戸県大参事に任命されたりしているのだから、かなりの人物だったのではないだろうか。晩年は、安達太良山麓の開墾に尽力した郷土の偉人であったことも分かった。

釧路で武四郎との間に何があったのか、私は知らない。また、釧路の役人として非行が実際にあつたのかどうかも分からない。ただ、アイヌに和人風の髪型や和人名を強制したのは、事の善悪は別として、幕府や箱館奉行所の方針に忠実に従って励もうとする、地方役人としての実直さ、真面目さの表れととれないこともない。

彰義隊の頭に祭り上げられたのも、一流の武術や奥羽人としての気骨が認められたこともあつただろうが、これまで扱ってきた幕府が劣勢不利だからといってあつさり見限りはしないという、武人としての彼の矜持が支持されたからではないだろうか。たしかに、伊勢神宮の地出身の尊皇派武四郎とは相容れないものがあつたかもしれない。

明治新政府への公式報告書である『山すじ日記』冒頭に、武四郎が小田井への名指し酷評を置いたのは、幕府の下級役人であつた自分の経歴を意識し、新政府のために全力を尽くそうとする決意の表れだったと評価すべきだろう。

### ◎『二本松藩史』第三編第三章「武藝家列傳」

(福島県立図書館提供)

小田井蔵太

諱は一成、千代住某の子、後小田井姓を冒す、小田井は姉某の嫁せる家なり。天保元年二月江戸藩邸に生る、幼名寅之助。幼にして父を喪ひ、母野田氏に伴はれて二本松に來り、宗家久保氏に寄る。年十二、本宮町の縁家高島氏に寓す。藏太小より豪放にして大志あり、居ること三年、出で、江戸に奔り、幕臣川窪駿河守の學僕となり、槍法を學び、又齋藤彌九郎に就いて劍術を修む。數年にして技大に進む。時に會津藩志賀小太郎槍術に於て海内

第一と稱せらる藏太之と技を闘はして勝つ。是に於て武名一時に高し。嘉永六年米艦浦賀に渡來し、天下騒然たり。幕府文武の士を招く、藏太徴されて家人に列せらる。安政二年函館奉行堀織部正に従ひて蝦夷地に渡り、累進して江刺奉行に任ぜらる、時に安政四年なり。居ること一年召されて江戸に還る。時に國事多端、鎖國攘夷の徒天下を横行す。幕府新徴組、新選組を組織し、武藝者を募りて之に備ふ。藏太信濃守に任官し、秩祿三千石、隱然新選組の首領たり。幕府の瓦解するや、藏太池田大隅守等と上野に輪王寺の宮を奉じ彰義隊の將となりて西軍に抗せしが、敗れて會津に入り、後庄内に入りて、西軍に降りぬ。明治の初水戸縣大参事に任ぜられ、後實業界に投ぜしも事成らず。明治二十五年三月二十五日本宮に客死す、享年六十三、石雲寺高島氏の先塋に葬る。

## ◎『福島県史』22

(福島県立図書館提供)

小田井蔵太 彰義隊副隊長 ①天保1年 ②明治22年2月19日 ③江戸 ④安達郡本宮町 ⑤重之助 幼時に父を失い、母にとまなわかれて二本松市鈴石に移り住み、少年時代は魚行商をして家計を助けた。青年時代に江戸へのぼり、幕臣川窪駿河守の学僕となり、槍法を学び、斎藤弥九郎について剣術をおさめた。嘉永6年幕臣に取り立てられ、安政2年函館奉行堀織部正に従い北辺警備に派遣され、同4年に江刺奉行を命ぜられた。その後信濃守に任官し秩祿3000石。戊辰戦争が近づくと急いで江戸に帰り、彰義隊に加盟し、副隊長に推挙された。彰義隊は上野にたてこもって幕府の支えとなつて戦つたが、慶応4年5月ついに敗れ、小田井は残党をひきいて東北に下る。会津藩を助けて戦つたが、ここでも敗れて本宮町に住みついた。明治維新後水戸県大参事に任ぜられたが、問もなく帰農し、主として安達太良山開発のために働いた。沼尻・中ノ沢温泉の開発者としても知られている。

## ◎『福島百年の人々』「名勝負物語り」

(福島県立図書館提供)

また、二本松藩の山田慶蔵・胖蔵兄弟、宮沢平八郎、小田井蔵太らもつわものども。(中略)

また小田井は本宮町の生まれで新選組にはいり、のち彰義隊の將となつた剣士。同町石雲寺に墓がある。

戊辰の役が終わり、剣士たちは他藩にあずかりの身となつて、全国各地に四散して行つた。時が過ぎ、ふるさとへ帰つたものもあれば、永遠にふるさとの地を踏まれぬものも多かった。しかし、県内ではぐくまれた剣の道は郷土愛に燃える数少ない人たちによって、明治、大正、昭和へと受け継がれてゆくのである。

## ◎『本宮町史』11 第六編第一章第三節「本宮の武術家」

(福島県立図書館提供)

小田井蔵太

また、武術家として幕末に彰義隊の隊頭であつた小田井蔵太がいる。蔵太の父は二本松

藩士伊東文司兵衛（壬申戸籍）といい、一八二八年（文政十）に生まれた。幼少にして父を失い、縁故をたより本宮の高島屋に一八三九年（天保十）十二歳のころ寄寓きやく。のち江戸へ登り幕臣川窪駿河守の家僕となつて、文武の修業に励んだ。剣術を齋藤弥九郎（幕末維新時代の最も有名なる剣客、名は善道、字は忠郷、篤信齋と号す）に学び達人の域に達したという。諱を一成、千代住蔵太（のち姉の婚家の小田井姓）と称し、一八五二年（嘉永五）二十五歳のとき、幕府の「武術稽古場御世話役並」に仕官、二〇俵二人扶持を受けた。一八五五年（安政二）には堀織部正に從つて蝦夷地に渡り、一八五九年（安政六）静河スガカ（榑太）鱒漁場開発を上陳している。定役（江刺奉行）をつとめ、のち江戸へ戻つた『本宮町史』5 四〇一 文久三年七月「箱館役人本宮宿休泊足銭帳ほか」に、（文久三）亥正月二十四日御登り御昼小田井蔵太様スガカが見えるので、このときと推定される。一八六三年（文久三）新徴組を組織して、信濃守に任官、一八六八年（慶応四）二月彰義隊を結成、四月池田大隅守とともに隊頭となるが、同年五月十五日上野戦争に際し彰義隊は敗れ、蔵太は参戦しなかつたが輪王寺宮（のちの北白川宮能久親王）を護衛し、海路東北へ逃れた。のち使命を帯び各地で活躍した。

維新後明治十年代に本宮の高島屋に寄寓して、少年や一般人に剣術の指導をした。かわら、安達太良山西麓の産業開発に乗り出し、シイタケ栽培に従事、中の沢への引湯を提唱した。蔵太は一八八九年（明治二十）十二月六十二歳をもって本宮で没した。石雲寺墓地に「小田井蔵太一成之碑」がある。〔執筆者 山崎清敏〕

### ◎小田井蔵太墓碑銘

（福島県本宮市 明間祐寿さん提供）

正面

小田井蔵太一成之碑

天野八郎嫡孫 松本文三書

裏面

小田井氏幼名寅之助後蔵太諱を一成といつた天保元年江戸に生れ 幼時父を失い 母に伴われ二本松に移り十二才の頃本宮高島家に寄寓し後江戸に上り幕臣川窪駿河守の學僕となり文武の修業につとめ殊に武藝は達人の域に達した嘉永六年米艦来航の時守人となり安政二年蝦夷地に渡り江刺奉行を勤めて帰る戊辰の風雲急を告げるに当り彰義隊に加盟し副隊長に進んだ人となり豪放機敏体驅堂々隠然たる首領であつた慶応四年五月彰義隊破れ輪王寺宮をお護りして当地に來たり奥羽連盟のために東奔西走し戦終るやまた宮のお伴して東京に上り赦されて水戸県大参事となつた後官を辞して実業界に活躍し晩年再び高島家に寄留し安達太良山の産業開発に尽したが明治廿二年十二月十九日病のため不帰の客となつた享年六十才本年戊辰百年を迎い墓碑を建てて生前の功績を録し以て其靈を慰めんとするものである

昭和四十二年十二月 主催 小田井蔵太墓碑建設委員会

本宮追史会



小田井蔵太一成之碑（中央）と小田井蔵太墓（右下）  
 福島県本宮市 石雲寺墓地  
 福島県本宮市 明間祐寿さん提供

協賛 石雲寺 檀信徒会

石雲寺 代三十一世 琢良

本宮町 教育委員会

※ 撰文 曾我伝吉

※ 『本宮町史』文化 各論編Ⅲ』

671～672 p

## 七 出発地点

『山すじ日記』の冒頭に、「去る明治元戊辰の閏四月六日初夜過る比、雨降りに余が下谷【下谷】三枚橋なる寓居の戸を叩く者ありければ」とあるので、明治二（一八六九）年二月十日も、武四郎はここから東海道山すじの旅へ出発したものと私は思い込んでいた。

二〇〇七年北海道浜歩きの同行者、もぐらもちさんのホームページ『松浦武四郎案内処』に解説された慶応三（一八六七）年九月五日付と思われる武四郎の書簡に、現住所として「江戸下谷中御【中御】かち町【まち】通り三枚橋の北 三橋国之助地面」と記されているのがそれだろう。武四郎はここに元治二（一八六五）年二月九日以来、三年余りの間住んでいる。

東京国立博物館のサイト「情報アーカイブ 古地図」にある嘉永六（一八五三）年発刊の「江戸絵図」によって、当時の「三枚橋」と、「中御かち町通り」にある「三橋弥五郎」宅の位置が判った。ただ、「三橋弥五郎」と「三橋国之助」の関係が分からず、武四郎の住んだ三橋長屋の位置は不明のまま。東京都台東区役所からご教示いただいた「三枚橋」と「三橋弥五郎」宅の位置情報を、「資料」のページ中「[三『カシミール3D』データ](#)」のウエイポイント中に置く。私が試みに嘉永絵図と『二万五千図』を方位・縮尺を調整して重ね合わせてみた位置も、これから大きく外れていない。

ところが、『校注簡約松浦武四郎自伝』に、「慶応四年（九月八日改元明治）五月八日岩



明治初年の馬場先門 長崎大学付属図書館・蔵  
橋の左袂が岩倉具視邸か F. ベアト・撮影

各地に移築され、現在は新宿区の玄国寺書院や、



馬場先門跡より岩倉具視邸跡を見る

馬場先門内の角地にある岩倉邸に住んだことから、武四郎は「馬角齋」の号を用いたと言われている。同じ号でも、剛直球の「憂北生」や「北海道人」とは違い、「馬鹿くさい」「兎に角、馬に角」など、北齋張りの捻りを利かせている。

倉邸内へ引移り」とあり、下谷の寓居で東征大総督参謀の呼び出しを受けた一月ほど後、武四郎は北方政策顧問格として求められて、岩倉具視邸へ転居していたことを知った。武四郎は、大久保利通の推薦で岩倉の知遇を得ていた。のち、漢詩人小野湖山と二人で購入した神田五軒町三番地の大関氏屋敷跡六百坪に移り住む明治六（一八七三）年五月六日までの五年間、武四郎は岩倉具視の厄介になったわけだ。岩倉にも有能な人材確保の必要があり、武四郎にも大混乱した江戸で警備嚴重な新政府要人邸に身を置く利点があったのだろう。

したがって、明治二年の旅立ちちは、岩倉具視邸からと判明した。岩倉邸は、当時の江戸城馬場先門内にあり、元松平上総守の上屋敷だった。現在の皇居外苑にある皇居前警備派出所の付近だ。具視の死後建物は兵庫県西宮市の西宮神社六英堂などとし



玄国寺書院



六英堂 神主NOBBYさん提供

◎ 「広谷良韶のページ」トップページへ移動←

<http://www42.tok2.com/home/hirotani52/>

◎ 「東海道山すじ紀行」ページへ移動←

<http://www42.tok2.com/home/hirotani52/yamasuji/yamasuji.html>